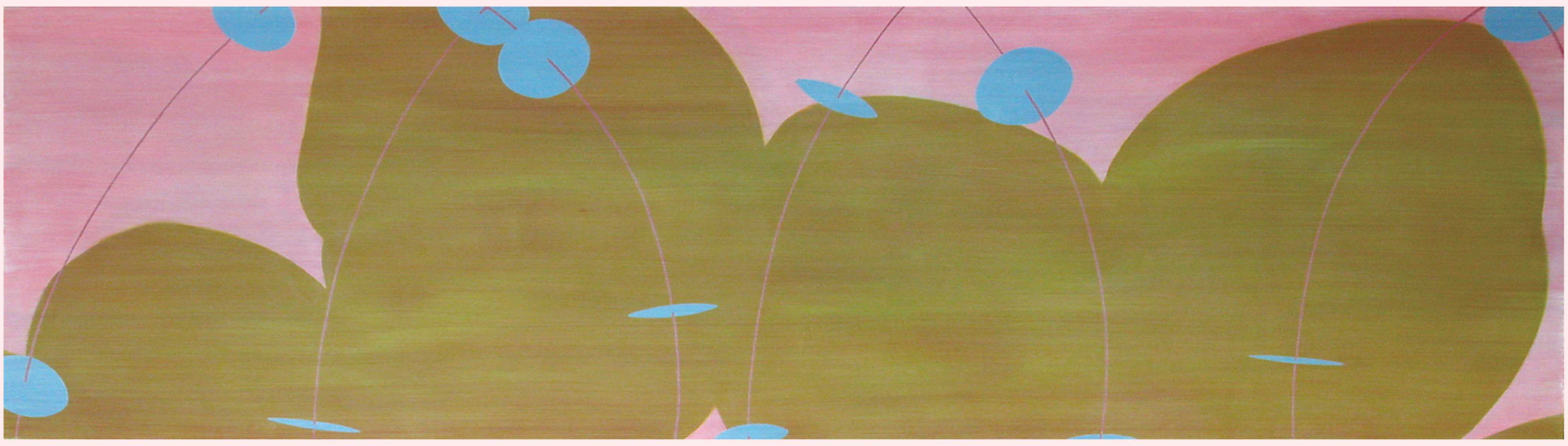
田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.40



湯川雅紀《Haru》　2002（平成14）年　　田辺市立美術館蔵

《Haru》の制作について

この作品は私がドイツへ渡り、デュッセルドルフの芸術アカデミーで5年間学び、アーティストとして一人でアトリエを構えてさらに5年が過ぎた頃に制作した作品です。

制作にあたっては、色に関してかなり苦労した覚えがあります。

まず白いキャンヴァス下地に背景のモコモコした楕円の重なりを渋めの緑で描きました。計画では赤を基調とした作品にしたかったので、画面全体に透明の赤を塗りました。その結果、下地部分は白いので鮮明な赤に、緑の背景は透明な赤が重ねられて暗い赤褐色になりました。

そこに明るい青の円板をモチーフとして配置してみましたが、どうも背景色と円板の青の組み合わせが落ち着きません。背景全体が赤と赤褐色で、そこに明るい青ではコントラストが強すぎるのかと思い、薄く溶いた透明度の高い白を全体に塗り色調を落ち着かせようと試みましたが、今度は全体的に白っぽくなってしまいました。そこでまた赤の色味を変えて塗ってみたり、青の明るさを変えてみたり、完成までに何度も試行錯誤を重ねました。

最後、全体に黄色系の透明色を塗ってみたところ、背景の楕円にあたる部分が黄土色っぽい色調となりました。この色を活かすため、下地にあたる部分に塗られた黄色を洗い流し、従来あったピンク系の色調を復活させ、黄土色とピンクの組み合わせの上に青の円板を配置した現在の色調になりました。

ただこの色調は描いた当時全然気に入っておらず、さらに青をもっと暗くしてみようとか、全体の色調をもっと工夫する余地はないかとか、いろいろ試そうとしたのですが、家族に諫められ踏みとどまりました。

数日後、ドイツのシュヴェルムという町の芸術協会で個展を開催した際、会場に本作を展示してようやく、この色調でよかったんだ、と納得がゆきました。ピンクの下地に黄土色の背景とブルーのモチーフという組み合わせは今まで使ったことがない組み合わせでしたが、とてもやわらかで広がりがあって、この作品のスケール感を際立たせているように思えました。“Haru” というタイトルはこの色調にちなんでつけたものです。

作品を創っていると自分が知っているものや過去の成功体験に縛られ、知らないうちに自分を型にはめてしまい自由で新しい試みを避けてしまうことがあると痛感させられました。作品制作が独りよがりにならないための教訓としています。

（湯川　雅紀）

※今回特別に作者の湯川雅紀氏より自作についてのご寄稿をいただきました。

田辺市立美術館へのきもち㉚

木村蒹葭堂（1736 ～1802）は、通称坪井屋吉右衛門、大坂の北堀江（現大阪市西区）で酒造業を営んだ町人である。18世紀を代表する知識人であり、大坂を訪れた朝鮮通信使などによって海外にも知られた文人であった。

蒹葭堂の展覧会が開かれるのは、実に 2003（平成15）年の大阪歴史博物館での没後 200年記念「なにわ 知の巨人 木村蒹葭堂」以来である。彼の回顧展があまり開かれなかった理由には、本草学や博物学、物産学などの理系の学問への傾斜と、文人画や漢詩など文系の芸術にも残した足跡が広すぎて、実像をつかみにくかったことがあるだろう。蒹葭堂は学術資料や書画、貴重書の大コレクターでもあったし、学術的な書物を何冊も資金を出して刊行した出版家でもある。

こんな傑出した人物はめったには居ない。展覧会を企画側から見れば、画家なら画家、博物学者なら博物学者、というふうに、その人物の業績を単純に決めつけられる方が分かりやすいのは確かである。しかし、その多彩な活動や複雑さこそが、現代に再評価されるべき蒹葭堂の偉大さなのである。

そして今回、田辺市で展覧会が開催された理由には、蒹葭堂のライフワークである貝殻研究の『奇貝図譜』（辰馬考古資料館蔵）が田辺とも関係が深いことがある。『奇貝図譜』には、浄恩寺をはじめ当時の田辺の貝類蒐集家の資料が掲載されている。展覧会にも『奇貝図譜』と、その執筆に際して蒹葭堂が参照した可能性のある浄恩寺の貝類コレクションも出品された。時代を超えての二つの資料の出会いである。

さて「蒹葭」とは漢詩で「蘆」を意味する。文豪芥川龍之介は随筆「僻見」で、フランスの哲学者パスカルの『パンセ』の名言を引き合いに「我々はパスカルの言つたやうに、ものを考へる蘆である。が、実はそればかりではない」とし、人間は「一面にはものを考へると共に、他面には又しつきりなしにものを感ずる蘆」であり「微妙にものを考へると共に、微妙にものを感ずる蘆、──さう言へば巽斎は不思議にも蒹葭堂主人と号してゐた！」と述べている。

学者としての知的で論理的な部分と、画家としての情的な部分が蒹葭堂のなかで絶妙なバランスで混ざり合っていることの指摘であり、パスカルと蒹葭堂を結びつけた巧みな着目点である。

そうした「微妙にものを感ずる蘆」としての蒹葭堂が活躍した別の領域が、『近世畸人伝』でも知られ、池大雅や伊藤若冲などの画人とも交流のあった売茶翁が広めた煎茶である。煎茶は、千利休が大成した茶の湯とも異なり、中国文化を憧憬する文人趣味に支えられた。特に大坂では、蒹葭堂や知友の上田秋成が愛好して発展する。「微妙にものを感ずる蘆」としての蒹葭堂を知るには、山水図や貝類標本を眺めるだけではなく、煎茶についても体験する必要がある。

そこで今回の展覧会では、2月25日（日）に、大阪を拠点に活動する文人茶の一茶庵・佃一輝宗匠をお招きし、私と美術館のホールで対談トークを開催した。

当日は糸川学芸員の司会のもと、最初に、大阪市中央区にある一茶庵（国登録有形文化財）での茶会の一部を動画で見てもらった。

まず来客は、茶席に入る前の小部屋に掛けられた岡田米山人の漢詩の軸について、それが何かを語りあう。微妙にものを感じる好奇心あふれる旅への導入である。本席に移っては本格的な文人画が床に掛けられ、賛文の漢詩を読み下して意味をとって作者の思いを探り、描かれているモチーフや構図、筆法の味わいなどについて議論をはじめる。そんな茶席が動き出すところが紹介された。

名品を眺めて道具を賞賛する茶の湯の静謐さとは異なり一茶庵の文人茶は、名探偵コナンの一場面のように「ああでもない、こうでもない」と賑やかである。トークでは、佃宗匠が文人茶における書画や茶器の鑑賞の面白さが、中国文化に対する高度な知識に裏打ちされた主客の会話の妙味にあることを話された。

そして私との座談になって、日本の文人と中国の文人との違いや、和歌山ゆかりの桑山玉洲をはじめとする日本の文人画のあり方、近世から近代にいたる大阪という街の文化の特質などの問題から、来訪者名を記した「蒹葭堂日記」の扱い方や、本展に展示されている蒹葭堂の作品や資料についての特色、虫を記録した「薩州蟲品」（辰馬考古資料館蔵）が若冲の「動植彩絵」の「池辺群虫図」を思わせる話などがつづいていく。

蜜柑酒の話もトークにあがった。『蒹葭堂雑録』によると造り酒屋であった蒹葭堂が蜜柑で酒を醸し、長崎の中国人たちからそれを讃えた漢詩をもらったことで知られる。蜜柑といえば和歌山ではないか。本ニュースも「ORANGE」だし、この日も私は、南紀のみかん畑の中を特急くろしおで揺られて田辺に到着した。すでに商品化されているかもしれないが、今回の展覧会を機に美術館と提携して、名産・梅酒に加えて地元で蒹葭堂の蜜柑酒を再現開発してみるのはどうだろうか。

田辺市立美術館での対談トーク「Sencha［煎茶］×Bunjinga［文人画］ Bunjin主義（イズム）の神髄（エッセンス）を探る」にて

トークでは大きなテーマから、古美術商が「けんかどう」と発音するときのイントネーションは和歌山弁とする説があるが本当か、などのローカルな話題でも盛り上がった。最近流行の言葉に「萌え」があるが、まさに「蒹葭堂萌え」の贔屓二人がしゃべり尽くした公開放談会であったろう。

話をおわるに際して宗匠から、煎茶は知識人、教養人に支えられた高度な“遊び”の世界である、そうした精神を現代にも必要とする言葉があった。私流に補足するとそれは、茶を味わうことを契機としながら、個人個人が主体的に絵画や漢詩を愉しみ、味わっていく体験を重ねることと言えるかもしれない。

近現代の美術とは違って、文人画の世界は人によっては難解に感じられるものだろう。しかし、主体的な鑑賞姿勢によって、はっと気づくことも多い。展覧会は発見の場である。そうした鑑賞者が増えることを期待している。

いっそのことトークで映したような煎茶会を、展覧会関連の体験型ワークショップとして開催するのはどうだろうか。特に近年、田辺市立美術館では、祇園南海や桑山玉洲、野呂介石など地元ゆかりの文人画の展覧会を意欲的に開催している。本物の作品を眺めつつ、茶を味わうのは格別である。

会場としては、蒹葭堂と博物学的関心におけるつながりで南方熊楠ゆかりの建物を茶会の場とするのも、時空を越えて二人の知の巨人が邂逅して面白い。分館である熊野古道なかへち美術館の現代建築の中で、現代染織作品に囲まれて開くのも愉快である。

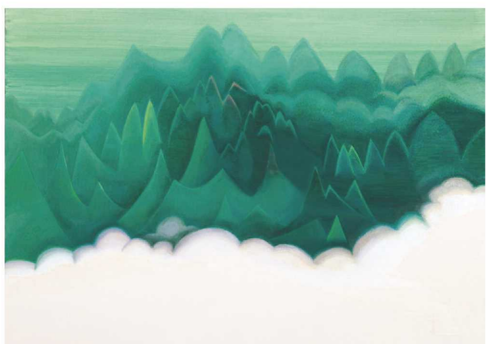
その席上きっと我らの蒹葭堂さんも、有名な谷文晁筆の肖像画（重要文化財）に描かれたように、口元を緩めて微笑まれていることだろう。茶席には蜜柑酒もおわすれなきように。

（大阪大学名誉教授　橋爪　節也）

絵画と出会う「この一点！」

世界遺産登録20周年記念小企画展
熊野の風景

会場：田辺市立美術館
会期：2024年4月13日（土）～6月16日（日）



押江千衣子《山のあなた》　2007（平成19）年　　個人蔵

今年は熊野を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されてから20周年を迎える年になります。この機会に４月から様々な熊野の風景を主題にした作品を紹介する小企画展「熊野の風景」を開催します。

出品する作品の一つである図版の《山のあなた》は、もくもくと湧き出る雲の奥に、みずみずしい山の重なりが広がる風景が描かれています。本作は2007（平成 19）年に和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館の３会場で開催した展覧会「森のなかで」展のために、押江千衣子（1969 ～　）が春から初夏にかけて熊野を取材して制作した作品の一つです。熊野本宮大社の旧社地である大斎原の河原から見える光景をもとに描かれました。

それまでの押江は主にヤマゴボウやヒヤシンスといった身近な草花に目を向け、柔らかで生命感のある作品をオイルパステルで制作していました。本作では遥かに大きな熊野の山々の存在を、油絵具を使ってあたたかなまなざしをもって描いています。畏怖の対象として描かれることが多い熊野ですが、押江の熊野の風景からは、明るさをもった生き生きとした山の鼓動が感じられます。

（学芸員　知野　季里穂）

田辺市立美術館NEWS　ORANGE Vol.40
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和６年４月１日

田辺市立美術館
〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

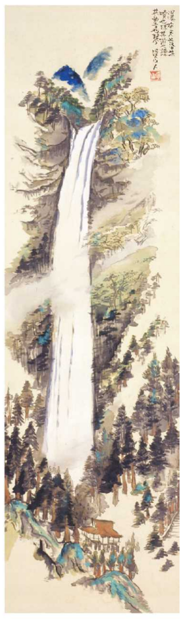
田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編 集 後 記

恒例の展覧会スケジュールを今号も付けています。切り取って、折りたたんで利用していただき、美術館に親しみをもっていただけたらなあと思っています。今年度も皆さまのご来館をお待ちしています。　　(F.O.)

2024年度展覧会案内

仙境　南画の聖地、ここにあり



冨田渓仙《那智山瀑布図》　1928（昭和3）年　個人蔵

1. 世界遺産登録20周年記念小企画展　熊野の風景

紀伊山地の霊場と参詣道の世界遺産登録20周年を記念し、田辺市立美術館の所蔵品を軸にする近世から現代までの熊野の風景を主題とした作品によって、当地のもつ魅力を改めて広く伝えます。

2. 小企画展　織の表現 2024

田辺市立美術館の織による造形作品のコレクションを主にして、新しい表現を切り拓いてきた作家たちの制作を紹介します。昨年度に新たに収蔵した潮隆雄の作品の特集コーナーも設けます。

3. 世界遺産登録20周年記念特別展　仙境　南画の聖地、ここにあり

和歌山県立近代美術館と田辺市立美術館が共同で、紀伊山地の霊場と参詣道の世界遺産登録20周年を記念する特別展を開催します。和歌山ゆかりの南画家たちの作品を軸にして、伝統的表現から革新的表現が模索されていった近代南画の展開を伝えます。

4. 館蔵品展　近代洋画コレクション展

田辺市立美術館のコレクションの中から、近代の洋画を特集して紹介します。

5. 館蔵品展　文人画コレクション展

田辺市立美術館のコレクションの中から、文人画の作品を特集して紹介します。

田辺市立美術館　TANABE CITY MUSEUM OF ART

2024年度展覧会案内

1. 特別展　Tomonari Hashimoto Untitled

独特の質感を持った、球や立方体といったミニマルな形の作品を発表し、国内外で高く評価されている、和歌山県湯浅町出身の陶芸家、橋本知成（1990～　）の近年の作品を展観します。

2. 特別展　現代の織Ⅶ　佐久間美智子

現代の優れた織の造形を紹介する展覧会シリーズの７回目。自然界から得た感興を、織るという行為と時間の中で熟成させて造形し、内省的、精神的な表現を確立している佐久間美智子（1945～　）の制作を特集します。

3. 世界遺産登録20周年記念特別展　仙境　南画の聖地、ここにあり

和歌山県立近代美術館と田辺市立美術館が共同で、紀伊山地の霊場と参詣道の世界遺産登録20周年を記念する特別展を開催します。和歌山の風景を描いた南画家たちの作品を軸にして、近代の熊野の風景表現を伝えます。

■くまびで作ろう！

講師のアーティストとともに「熊野」をテーマにした作品をつくるワークショップを開催し、その成果を展示する「くまびで作ろう！」の３回目。今回は、場所や人、物の記憶をテーマに、収集した古物や写真などを使ったインスタレーションを制作している河野愛（1980～　）を講師に迎えます。

Tomonari Hashimoto Untitled

橋本知成《Untitled》　2023（令和5）年　　個人蔵
photo：Gentoku Katakura

KUMANOKODO NAKAHECHI MUSEUM OF ART　熊野古道なかへち美術館